

子どもにとどく語りを

藤井いつみ

目次

装丁 小林 将輝
挿絵 新井由美子
写真 長谷川真生

第一章 「まめの木」ができるまで 11

なぜ語り始めたのか 12

勉強時代 16

はじめて子どもに語って 17

語り始める 18

聞き手が減っていく 19

「まめっちょ」の起こり 21

第二章 お話を耳で聞くこと 23

「お話」という言葉 24

お話の特徴 28

頭の中で想像する／推測する／

主人公の身になって聞く／的確な表現にふれる

お話と絵本 43

聞くことと読むことの違い 46

第三章 話を選ぶ心 53

選ぶカン 54

選びが大切 55

三つの条件 57

第四章 何を語るか 71

伝承の話と創作の話 72

昔話の特徴 75

「うり姫」をもとに昔話の文法を見る／

再話のよしあし／残酷性について

こわい話／ゆかいな話／

悲しい話／小話

聞き手に合う話、成長にそって 98

第五章 覚え方

119

- 時間をかけて覚える 120
- 声に出して読む 122
- イメージする 124
- 構成をとらえる 131
- 区切って覚える 138
- イメージをふくらませながら語ってはいけない話 139
- 覚え方の工夫 141

第六章 語り方

143

- 上手下手ではない 144
- 心をこめて語る 146
- 声が大切 149
- 表情、身振り 152
- テンポ・間・リズム 153
- 歌 155
- 土地言葉 158

第七章 語るとき

165

- どこで語るか 166
- 場の作り方 169
 - 場所／場作り／広さ／明るさ／
 - 座り方／時間／人数
- プログラム 179
 - プログラムの立て方／聞き手の年齢を考える
 - わらべうた 185
 - わらべうたとお話 188
 - プログラムの例 190
 - お話会の進め方 194
 - 部屋に入れるとき／始め方／知っている話／
 - わからないことに出会ったら／質問されたら／
 - 終わり方／途中の出入り／聞き手をリラックス／
 - 子どもだけか、おともいっしょか／グループで語りをするとき

第八章 お話と読書

223

あとがきにかえて

230

本文中でふれたお話・資料

237

はじめに

私がいつも座る椅子に腰をかけ「さあ、お話を始めましょう」というと、子どもたちはいつせいに期待をこめた目でこちらを見てください。今日もお話を通して、子どもたちといっしょに想像の世界へ旅して行けますように、この子どもたちの期待に応える語りができますようにと、祈るような気持ちになる一瞬です。

お話を語っているあいだは、聞き手の子どもたちと年齢の垣根を越えて、心を通いあわせることのできるひとときです。ことに、子どもの琴線にふれる体験ができたときなど、人間として通じあえた大きな喜びを感じ、なまの声で語る言葉の力に圧倒される思いがします。

昔から、人びとはお話を語って楽しんできました。いまの子どもたちに、絵も映像もなく、語る言葉だけでお話をとどけることは、とてもむずかしいように思われていますが、そんなこととはありません。いまの子どもたちもお話が大好きです。おとながよいお話をとどけることができれば、子どもたちは喜んで聞いてくれます。

道具も何もいらぬ、素朴なお話で、子どもたちをもてなしてみませんか。

お話に対する姿勢と、大切な点を勉強し、少しの努力をすれば、きっとすばらしい喜びをえられることでしょう。

はじめに

第一章 「まめの木」ができるまで

なぜ語り始めたのか

幼い日に体験したことが脳裏に焼きついていて、長いあいだすっかり忘れていても、ふとした折に頭をもたげることがあります。そればかりか、人生の岐路に立ったとき、どの道を選ぶかの決定を、幼い日の体験が後押しすることすらあります。

私がお話を語ろうと考え、勉強を始める行動を起こしたのは、一九七七年です。娘時代から、一生自分を賭けられるような仕事をしていきたいと考えていました。しかし、それが具体的に何なのか、なかなか見つかりませんでした。とりあえず、できそうなことを手当たり次第にやってみましたが、これぞと思えるものに出会えないままに結婚しました。そして長女を出産し、慣れぬ育児に悪戦苦闘しているときに、私のなかでムクと頭をもたげてきたものがありました。それは、私が幼い日に聞いて楽しんだ「お話」を、わが子をふくめたまわりの子に語っていかうという思いでした。

私は関西育ちですから、雪の夜、囲炉裏ばたで、というような語りは聞いたことがありません。お話をしてくれたのは、もっぱら従兄妹たちでした。長い休みがあると、奈良の祖母の家に泊まりがけで遊びに行っていました。大勢の親戚が集まり、従兄妹たちもやってきて、それだけでも楽しかったのですが、私はそんなとき、年齢の違う大きな

従兄妹から聞かせてもらおうお話がなにより楽しみでした。落語好きな従兄はゆかいな話を、医学生だった従兄はこわい話をしてくれました。「夜、解剖室から死体が……」といわれただけで、こわくてこわくて、ふるえあがりながらも耳をそばだてたものです。なかでも話上手だったのは、従姉でした。話が安定していて、安心して聞けたのは、いま考えると、昔話を語ってくれたからではないかと思えます。あのときの、あの幸福感をわが子にも味わわせてやりたいと思いました。そこで、赤ん坊だった長女をあやしなから思いだして語ろうとしました。

ところが出てきたのは、「まごしちやーい」と、何者かがうしろから追いかけてくる言葉だけでした。お話としてはさっぱり覚えていないことに気づき、本当に残念な思いをしました。

そのころ出会ったのが、石井桃子著『子どもの図書館』です。大部分が石井さんの主宰する、かつら文庫の記録で、生き生きとした子どもの様子が書かれています。この本ではじめて、文庫の存在やそのすばらしさを知り、近くにあれば行ってみたいと思いました。けれどもそのときは、自分で文庫を開こうなどとは思いませんでした。なにしろ借家暮らしの身でしたから、そんなことは夢のまた夢でしかありませんでした。

『子どもの図書館』の中で、私がつとも興味を惹かれたのは、後半に書いてあった部分でした。外国では、図書館でストーリーテリングをして（お話を語って）子どもたちサーブイスをしているというのです。図書館で子どもたちにお話を語るというのは、大きな驚きでした。私の中では、図書館というところは、何か厳しい場所という印象があつたからです。とにかく静かに本を読む堅苦しいところだと思っていました。ところが、外国では、その図書館で、お話を子どもに語っているというのです。

子どものころ、私は祖母の家で、夏の夜は大きな蚊帳の中で雑魚寝をしながら、冬はこたつにもぐりこんで、お話を聞かせてもらっていました。けっして堅苦しい場ではありませんでした。

もともと、お話を楽しむことは、世界中どの民族も味わってきた喜びだと思えます。そしてそれは集落や家族のなかなど、ごく親しい間柄で語られ、生活の一部であつたに違いありません。

けれども、ラジオ、テレビの普及とともに、家の中でお話が語られることはほとんどなくなりました。私が語りを意識し始めたころ、わが家の近所でも、テレビで大人気の昔話のアニメを夢中で見て、同じ内容の昔話をカセットテープで聞きながら寝るんだ、

と嬉しそうにいう子どもが大勢いました。もちろん親たちが語っているという話は聞いたこともありません。しかし、私自身の体験からも、なまの声でお話を聞く楽しさは、テープなどの機械を通した声とは、とてもくらべものにならないと思っていました。

ところが、時代の風潮として、少しでも早く字を教え、知識を詰めこめば、子どもの知力が伸びると信じられていました。学歴がつとも重視されていたからでしょう。本を読んでやることや、ましてお話を語ってやることは役に立たない、過保護だとさえいわれました。でも、私は、字を覚えたての子がたどどしく本を読んでも、文字が頭の中を素通りするだけではないかと思いました。教育、教育と子どもをあとり立てる前に、おとながすべきもつと大事なことがあるのではないだろうか。子どもを育てる上で、このままでは、どこかにねじれが生じるのではないだろうか、と不安を感じました。

果たしてこのままでいいのか、という思いがあつたとき、『子どもの図書館』を読んだのです。そこでは、子どもたちにお話をなまの声でとどけることの大切さが説かれていました。お話を聞く場が家庭から公共の場へと移っても、語れる場所があるなら、私もぜひ、その活動に加わりたいと思いました。日本の図書館も子どもを大切にするようになってほしいし、お話の部屋があるような図書館ができるとどんなにいいだろう、そ

のためにもぜひ語りの勉強をしたいと思いました。これが私の求めていたものだ、やっ
とめぐり会えたという喜びでいっぱいになりました。

勉強時代

勉強する場を本気で捜していたところ、東京子ども図書館で学べることを知り、門を
たたきました。そこで、すでに文庫活動をしている人や図書館員に混じって勉強をし
たくさんの刺激を受けました。なんといっても松岡享子さん、佐々梨代子さんに指導し
ていただいたことは、幸せなことだったと思っています。

伝承の語り手は、子どものころ聞いた話を体の中にたくわえていて、いつでも再現す
ることができる、しかし、それができない者が語るには、まずよいテキストを選び、忠
実に覚えることが基本だと教えられました。覚えるときは、できるだけその話を頭の中
で絵にし、イメージをふくらませて言葉を手に入れたいくこと。語るときは、聞き手の
目を見ながら簡潔に語ればよく、上手に語ろうとすると、かえって話が伝わらないこと
があるなど、具体的な講義を受けました。

ところが、講義を頭で理解しても、実践するのはたいへんむずかしいことでした。ど

の話を選べばよいか、さんざん迷った末、最初に選んだのは「ならなしとり」という日
本の昔話でした。たった七分足らずの話ですが、覚えるのに四苦八苦しました。慣れな
い子育てをしながらなので、集中してお話に向き合うことがなかなかできません。覚え
ようとしても、すぐ気が散ってしまいます。どうにか期日に間に合わせて、勉強会で発
表しましたが、まちがえずに語るのがせいっぱいでした。

文庫などで子どもに語った経験のある人たちとは違い、私の語りはなんと余裕がない
のだろうと、情けなくなりました。話を覚えることや、イメージをふくらませることな
どは私なりに努力したつもりでしたが、聞く人に話がどこまで伝わったのかはわかりま
せん。果たしてこんな語り方で子どもたちが聞いてくれるのか、とても不安でした。

はじめて子どもに語って

せっかく覚えた話を、ぜひ子どもに語ってみたいと思いました。でも、わが子は赤ん
坊で、聞かせるのはまだ無理です。ちょうどそのころ、友人たちとの集まりがありまし
た。それぞれ四歳前後の子どもを連れてきていたので、これはチャンスとばかり、子ど
もたちに、覚えての「ならなしとり」を聞いてもらいました。

子どもの前で語るのははじめてだったので、どんな反応を示すのか、想像もつきませんでした。ところが、語り始めると、私の語りが未熟なものにもかかわらず、子どもたちは目をこらし、吸い取るように話を聞いてくれたのです。子どもたちの目を見ながら語っていくうちに、子どもが発するサインに気づき始めました。少しこわいところに来ると、「待って」という表情になり、沼の主の腹の中から小さい声が聞こえると、「きつと兄さんたちだ、早く助けて」という表情になるのです。それに応える気持で語っていくうちに、お話の緩急、間^まなどが少しつかめた気がしました。

語り手と聞き手との呼吸が合うと、自然にお話が生き生きとしてくることを実感しました。まさしく、お話の持つ力がそうさせたのだと思います。お話の力のすばらしさを身をもって体験できたひとときでした。このとき以来、子どもと話を共有する喜びは、私にとって、なにもものにも代えがたい大きな喜びとなりました。